

底を脱しつつある銀座の高級クラブ

～ 2005 年の市場規模は 900 億円 ～

2006年4月1日(土)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

～ 要 旨 ～

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

バブル最盛期、銀座の高級クラブは男性客で賑わい毎晩巨額の札束が乱れ飛んだ。しかし、90年代に入って、状況は一変する。官民の様々な不祥事が表面化するなかで企業が接待を自粛するようになったこと、景気の低迷が長引き、ビジネスマンの懐具合が寂しくなったこと、などから銀座に遊びにくる客の数はめっきり減るようになった。

実際、世界でも突出して高いと指摘されてきた日本企業の交際費は急激に減少している。国税庁の調べによると、企業の交際費の総額は、1970年代から80年代にかけて増加傾向で推移し、92年には6兆2078億円でピークをつけた。バブル崩壊後は、企業経営者の間に「接待はビジネスの潤滑油」という考え方がすっかりなくなり、ほぼ毎年減少。直近の2004年は3兆4393億円で、ピークの92年の半分程度にまで縮小した。これまで銀座に遊びにくるお客さんの大半は「社用族」だったので、企業の交際費の削減は銀座の高級クラブにとっては大打撃となった。

もっとも、最近では景気の回復を先取りするようなかたちで、銀座に客が戻り始めている。かつてのように接待費が増えて社用族が急増することはないが、華やかさを取り戻しつつあることは確かだ。

バブル期には不動産やゼネコン関係の経営者が中心だった客層は、現在ではヒルズ族などIT関連企業の若手社長などが中心となっている。深夜、艶やかな着物姿のホステスを伴ってタクシーを待つ客の数も少しずつ増えてきている。

銀座は、景気の先行指標となっており、銀座の夜のお店の業況が改善すると、半年から1年程度のタイムラグをおいて日本の景気も上向く。銀座の業況が底を脱しつつあるので、日本経済もこれから半年から1年先ぐらいまでは回復傾向が続くといえる。

ホステスの人数、ホステスの平均的な年収、そして店とホステスの取り分の平均的な割合をもとに銀座の高級クラブの市場規模を算出すると900億円程度となる。